● *My Twin Sister Erika*

ふたりのひみつ

I. ボーゲル／掛川恭子 訳

●*My Twin Sister Erika*

ふたりのひみつ

I.ボーゲル／掛川恭子訳

あかね世界の児童文学・17

訳者紹介　**掛川恭子**（かけがわ やすこ）
1936年東京に生まれる。津田塾大学英文学科卒業。英米児童文学の翻訳にたずさわる。主な訳書に「フランバーズ屋敷の人びと」三部作，「バラの構図」「小さな魔法のほうき」「アルフはひとりぼっち」他がある。

あかね世界の児童文学 17
ふたりのひみつ

訳　者　掛川恭子（かけがわ やすこ）
発行者　岡本陸人
印　刷　新興印刷製本株式会社（本文）
錦明印刷株式会社（表紙・扉）
製　本　株式会社　文麗社
発行所　株式会社　あかね書房
東京都千代田区西神田3-2-1　〒101
電話 03（263）0641〈代〉
振替 東京 3-64150

1977年9月10日第1刷

NDC 933　　8397-16817-0027

ふたりのひみつ
掛川恭子訳
あかね書房 1977
109 p　21cm（あかね世界の児童文学17）

© 1977 Printed in Japan 訳者との契約により検印なし
落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります

もくじ

1 どっちがどっち＊ 6
2 いちばんのなかよし＊ 22
3 ひみつの家＊ 49
4 お客さま＊ 70
5 エリカとインゲ＊ 82
作者と作品について＊ 106

Ilse-Margret Vogel
MY TWIN SISTER ERIKA
Copyright © 1976 by Ilse-Margret Vogel
Japanese translation rights arranged with Harper & Row, Publishers, Inc.
through Japan UNI Agency, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わたしの第二のふたご

ホワードと

この本の誕生に立ち会ってくれた

シャーロットとニナへ

ふたりのひみつ

イルズ＝マーグレット・ボーゲル作絵　掛川恭子訳

1　どっちがどっち

「きょうは、わたし、あなたになるわ。」

エリカとわたしは、ふたごです。そのエリカが、わたしがしようと思って手に持っていた赤いリボンを、ひったくりました。

「さあ、わたしの青いリボンをなさいよ。」

「いやよ。」

わたしは、じぶんのリボンをとりもどそうとしました。

「きょうは、わたしはわたしになるの。きのうも、その前の日も、その前の日も、エリカだったんですもの。きょうは、インゲよ。きょうは、じぶんでいる。」

エリカは首をふりました。

「じぶんでいるのなんて、つまらないじゃないの。それよりも、じぶんではインゲだってわかっているのに、ほかの人には、一日じゅう、エリカだって思わせておくほうが、ずっとおもしろいんじゃない？」

「そりゃ、そうやって、マックスおじちゃんをからかうのは、おもしろいわよ。おじちゃんたら、わたしたちのどっちがどっちか、わからなくなっちゃうんですもの。」

「それに、名前にしてもよ、エリカのほうが、インゲより、ずっとすてきじゃない。そのすてきなほうのエリカにならせてあげるんですもの、よろこぶ

べきだわ。」

エリカがいいました。

それはそのとおりでした。インゲより、エリカのほうが、ずっとひびきがいいのです。エリカからなら、ちょっとした歌をつくることだってできます。エもリもカも、とても音がきれいですから。でも、インゲではね！　ンという音のために、すっかりぶちこわしです。そのンが、まんまん中に、でんとかまえているのですもの。

「いい？」

エリカがききました。

「いいわね？」

エリカは、わたしの赤いリボンをじぶんの金髪にむすびながら、くすくすわらいました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

でも、わたしがはっきり、いいわ、といわなかったので、エリカはそのあとまた、いいそえました。

「きょうもまた、あなたがエリカだから、でっぱらのやぶにらみちゃんと遊んでいいわ。」

でっぱらのやぶにらみちゃんというのは、男の子の人形です。ちぢれっ毛で、ころころよくふとっていて、チロル地方の山にすんでいる人たちが着ているような服を着ています。きのう、マックスおじちゃんが、エリカにくれたばかりです。青い目が、まっすぐ前を見ていないで、ちょっぴり鼻のあたまのほうをにらんでいるのです。それで、その人形を見たとたんに、エリカが、

「でっぱらのやぶにらみちゃん、っていう名前にするわ。」

と、いったのです。

マックスおじちゃんはわたしにも、金色のほんものの毛を、長いおさげにした人形をくれました。ほんとうにほんものの毛なんです。そのほんものの毛を、わたしがいつもやりたいと思っているように、三つ編みのおさげにしているのです。わたしはいくらおさげにしたくても、毛がうすいから、できないのですけど。ドレスはピンクで、エナメルのくつをはいています。わたしはその人形を、フリーダとよぶことにきめました。

でっぱらのやぶにらみちゃんは、わたしたちが生まれてはじめてもらった男の子の人形なので、エリカは、さわらせてもくれなかったのです。

それで、わたしも、

「いいわ。」

と、いいました。

「じゃあ、わたしは、フリーダと遊んでいいのね？　髪をとかしてやっても

いいわね？」

「いいわ。」

わたしはそうこたえると、エリカの青いリボンを、髪にむすびました。それがすむと、服に着がえました。服はいつも、エリカとおそろいです。

わたしたちはふたりそろって、鏡の前に立ちました。うり二つの顔が、ならんでうつっています。あんまりそっくりなので、わたしはどっちがわたしかわからなくなって、顔をしかめてみました。でも、となりの顔もやっぱり、顔をしかめました。しかたがないから、青いリボンで、どっちがわたしの顔かたしかめました。

わたしとエリカは、下におりていきました。

マックスおじちゃんが、朝ごはんをならべたテーブルの前にすわって、新聞を大きくひろげていました。

「おはようございます、マックスおじちゃん。」
わたしがあいさつしました。
「おはよう、おはよう。ところで、いまのは、どっちだろうな。」
おじちゃんは、新聞のかげにかくれたままいいました。
「さあてと……うん、わかったぞ。インゲじゃないかね。どれどれ、この目でたしかめさせておくれ。」
わかってしまったので、わたしはがっかりしました。でも、それも、ほんのちょっとのあいだだけでした。マックスおじちゃんは新聞をおろして、わたしの頭に青いリボンがむすんであるのを見ると、くっくっとわらいながら、こういったからです。
「またやっちまったな。声でたしかにわかったと思ったんだが、見てみたら、エリカじゃないか。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com